さあ
硝子を纏って
道行く道に
花を

さあ
花の盆に
水を湛え
月を

さあ
月灯りの下
鈴を鳴らせ
時よ

人魚姫と王子様

青井 アカネ

物語が始まる前

海がありました。

昼の空のように明るい色をしていて、夜の空のように深い色をした海。

南の海では、赤や黄色や青い珊瑚がわれ先にと、その手を方々に伸ばし、橙や緑や紫色をした魚が、その間を縫うように素早く泳いでいました。

北の海に珊瑚はいませんでしたが、その代わりにたくさんの光の筋が、海の中を射抜くようにして、降り注いでいました。

その海には一人だけ、人魚がいました。

髪は光のあたり方で淡い水色や淡い黄緑色に変わり、鱗も同じように、キラキラと桃色や青色に変わります。

人魚はとても美しくて、長い髪をたなびかせて泳ぐ姿はとても優雅でした。でも人魚は自分以外の人魚を見たことがなかったので、自分がどんなに美しいのか知りませんでした。

人魚は起きているときは、色とりどりの魚とたわむれたり、光の差さない深さまで冒険したり、光の筋に口づけをしたりしながら過ごしていました。

疲れたときは、とても大きいイソギンチャクに体をあずけて眠りました。

ある日人魚は、夕暮れの砂浜で、人間の青年に出会いました。荒れ狂う海から助けたわけではありません。

その青年は、王子様でした。

大地の色をした髪に、真っ黒な夜空の色をした目。
人魚は一目で王子様に恋をしました。でも、恋を成就させるために、人間の足をもらおうなどとは、考えませんでした。
なぜなら、王子様も人魚に恋をしたからです。
人魚と王子様はお互いをとても大切に思い、そして、ずっと一緒にいよう、と約束をしました。

歌と呪い

話を聞いた王様は驚き、そして顔をゆがめました。
「人魚など、化け物ではないか！」
その言葉に王子様は怒りました。
「彼女が化け物に見える父上の目が、ゆがんでいるのだ！」
王子様は必死に説明しましたが、王様の耳には届きませんでした。
王子様は悲しくなって人魚に会いに行きました。そして人魚にそのことを話しました。
人魚は、申しわけなさそうににうつむく王子様を抱きしめて言いました。

「王様はあなたのことをとても愛しているのよ。そして私もあなたのことを愛しているわ。だから、ね。きっと、絶対に分かり合える」

王子様はその言葉に顔をほころばせ、人魚に口づけをしました。

毎日毎日、王子様は時間を見つけては、海へやってきて、人魚と話しをしました。でも相変わらず、王様は人魚のことを認めてはくれませんでした。

ある日、王子様は人魚の横で歌をうたいました。それは、王子様のおばあ様が教えてくれた異国の歌でした。王子様のおばあ様は遠い国から嫁いできたので、うたわれている言葉を王子様は理解できませんでしたが、いちばん気に入っている歌でした。

人魚はやさしく歌う王子様の歌声に聞き入りました。人間の歌を間近で聞いたのは初めてです。

うたい終わると、人魚はもう一度と、王子様にせがみました。王子様は恥ずかしそうに笑いながら、何度も人魚にうたって聞かせてあげました。

次の日、王子様が海へ行くと、人魚があの異国の歌をうたっていました。歌詞も旋律もきちんと覚えていました。

そしてその歌声はとてもすばらしいものでした。力強くよく響き、それなのに儚く思えるほど繊細な声。どんな称賛の言葉でも足りないほど、美しい声でした。

今度は王子様が、人魚のとなりで歌を聞き入っていました。

その歌を、王様の放った見張りが、しっかりと聞いていました。

見張りは王様に報告します。

「この世のものとは思えぬ声。まるでなにかに取り憑かれたかのように、動けなくなってしまいました」

その言葉を聞いた王様は国民に、人魚がうたう歌を聞くと、呪われてしまうと言い、海へ行くのを禁じました。

王様は王子様が呪いにかかってしまったのだと思いました。そして人魚を〝悪いもの〟だと思ったのです。

王様は王子様に見張りをたくさんつけて、海に近づかないようにさせました。そしてその間にたくさんの兵士を連れて海へ行き、人魚を殺そうとしました。でもうまくいきませんでした。

人魚は波打ち際の、ほんとうにぎりぎりのところに座っていたので、すぐに海に入ることができます。海に入ってしまえば、追いつけるものなど、誰もいません。

そして海の中からほんの少し顔を出して、王様が兵士を連れて帰るのを確認してから、また波打ち際に戻りました。

王様が人魚を殺しに行ったことを王子様が知り、王子様は悲しさと怒りでいっぱいになりました。でも王様に何度説明しても、「おまえは呪われているのだ」と言って取り合ってくれませんでした。

街は人魚と王子様の話で持ちきりになりました。

「ずっと誰も娶らなかった王子様が、まさか人魚とは……」

「人魚なんて絵本でしか見たことがないわ」

「本当にいるなんて思いもしなかった」

「しかもあんなに美しい」

障害の多い恋に、人々は色めき立ちました。

しかし、人魚の歌を聞くと呪われると聞いてから、風に乗って人魚の歌が聞こえてくると、大人は自分の子どもの耳をふさぎました。純真で澄んでいる子どもたちの心は、魔法や呪いにかかりやすいからです。

ただ、海の近くに住んでいる人や漁師は、何回も人魚の歌を聞いていたので、王様の言葉を疑問に思いました。あんなにきれいな歌が、本当に呪いの言葉なのだろうか、と。

ある日、勇気ある何人かが、砂浜の岩に隠れて、間近で人魚の歌を聞きました。しかしなにも起こりません。ただ人魚の美しい歌にほれぼれとするばかりでした。

呪いにかからないことがわかると、その美しい歌を聞こうと、こっそり足を運ぶ人が増えました。

それを知った王様はとても怒り、海沿いをぐるりと、耳栓をした兵士で囲ってしまいました。

そして人魚を殺そうと、また海へ出かけました。王子様は必死に止めようとしましたが、ついに城の奥に閉じこめられていました。

街の人たちはさらに疑問を深めました。なにより、人魚の歌が聞けなくなるのはいやでした。しかし王様に反論して殺されるのもいやです。なので街の人は、森の魔女に相談しに行きました。

街のとなりには、とても深い森がありました。青く青く、深い深い森でしたが、不思議と光のあふれる森でした。そのとても豊かな森には、森の魔女が一人、住んでいました。

魔女はとても若い女の姿をしていますが、もうすでに百年以上も生きてい

て、たくさんの知識と知恵で、困ったことがあるといつも助けてくれました。
街の人から話を聞いた魔女は、街の人に小さな袋をわたしました。袋の中には細かい砂のようなものが入っていました。
「これを海沿いの石畳のすき間のひとつに、まいておきなさい」
そして魔女は、明日の昼にできるだけ多くの人を海沿いに集めておくように、とも言いました。
街の人はさっそく、海沿いの石畳のすき間に、その砂をまきました。兵士に怪しまれるといけないので、海をうかがうふりをしながら、さりげなく。
その夜、魔女は言葉を吹き込んだ二匹の蝶々(ちょうちょう)を、窓から飛ばしました。

次の日の昼、魔女は森を出て街へ行きました。
魔女は腰まである真っ黒な長い髪に、地面を引きずるほど真っ黒な長い服と

いう、とても目立つ姿でしたが、誰も魔女のことを見ませんでした。なぜなら街には誰もいなかったからです。鍛冶屋も花屋も仕立て屋も学校も食堂も空っぽでした。
その代わり、海沿いは街の人で埋めつくされていました。海沿いに並ぶ兵士の何倍もの数です。異常な事態に、王様も馬に乗ってやってきていました。
魔女に気づいた街の人たちは、なにを言うわけでもなく、自然に道を空けました。道の先にうろたえた若い兵士がいましたが、魔女の目的は兵士ではなく、その足元でした。
魔女は靴の底をわざとこつこつと鳴らしながら進み、人々の注意を引きました。そして兵士の前に来ると、にやりと笑って跪(ひざまず)きました。兵士はさらに困惑しましたが、魔女は知らん顔をしました。
魔女は石畳のすき間をなぞりながら、呪文を唱えました。

此処に　此処に
緑と　土の　間から
掴み　手繰って　引き寄せて
此処に　此処に
もし　お前が　拒むなら
其の腕　もぎ取り　喰ってやろう
此処に　此処に

ふう

「つかまえた」

魔女がにやりと笑いました。その視線の先を見ると、石畳のすき間から小さな丸い突起が、ほんの少し出ています。魔女は、その突起をつまんで、一気に上へ引っぱりました。

なんと石畳のすき間から出てきたのは、王子様でした。さっきの突起は王子様の指先だったのです。

王子様は驚いていましたが、昨日自分の部屋に飛んできた蝶々が、すべて説明してくれていたので、うろたえることはありませんでした。

王子様の意識がはっきりしているのを確認した魔女は、目の前の兵士にふうっと息を吹きかけました。一瞬置いたのち、兵士がぐにゃりと体勢をくずしました。魔女はその兵士を蹴飛ばして道を開けると、王子様の腕をつかんで走りだしました。

それは本当にあっという間のことだったので、王様が王子様と魔女を見つけたときには、二人はもう砂浜の半分ほどに来ていました。

王様はすぐさま馬で追いかけましたが、魔女は長い裾を引きずっているのに、異常に速く駆けていました。

誰も追いかけてこないのを不思議に思った王様が振り返ると、街の人たちが兵士をつかまえて押さえていました。舌打ちをして王様が前を向くと、魔女と王子様は人魚のところへ着いていました。

人魚もまた蝶々から連絡を受けていたので、突然の事態に驚くことはありませんでした。

王様は馬の足を止めると、人魚をにらみつけました。何度となく殺されそうになっているので、人魚はその目におびえました。人魚の心はもう棘だらけです。

目をそらしてうつむいていると、なにかに肩をつかまれました。力強い魔女の手でした。魔女は人魚に笑いかけると、真剣な顔をして王様を見つめました。

「王よ。もう終わりにしようではないか」

王様は眉根を寄せました。

「終わりに？　ああ、終わらせようとも。その人魚が呪いを解いたらな！」

魔女は「呪い、ね」とつぶやくと、ふっと笑い、王子の腕をつかんで持ち上げました。

「呪いには匂いがある。どんなに巧みに仕組んだ呪いでも、絶対に微かに匂いがする」

そう言って王子の手首を鼻に近づけました。

「もちろん、おまえの息子からそんな匂いはしない」

「そんなはずは……！」

王様は目を見開きました。魔女は嘘をつくことができません。嘘をつけば、たちまちその力を失ってしまいます。魔女は魔女になるときに、そういう契約をするのです。つまり〝王子様は呪いにかかっていない〟という魔女の言葉は、絶対に真実でした。王様の額から汗が吹き出ました。

魔女は静かに語りかけました。なんだか少し悲しそうです。

「異形の者、化け物というのなら、それは私も同じだ。こんな姿なのに、もうとっくに百を過ぎている。それに私は、お前たちには使えない、不思議な術を使うだろう。……なのに私のことは、化け物とは言わないのか？」

王様はさらに黙り込みました。視線を人魚に向けると、いつの間にか王子様が人魚のとなりにいました。おびえる人魚に、やさしい笑みを向けていました。その笑顔にはおかしいところなどなにもない、小さいときからずっと見て

きた、いつもどおりのやさしい王子様の笑顔でした。
その笑顔を見て、王様はやっと自分のあやまちを認めました。少し時間が経ったあと、王様は馬から降りて、三人のもとへ歩いていきました。
王様が近づくと、人魚が王子様の手をぎゅっとにぎりました。おびえる人魚を見て、王様は悲しくなりました。王様は人魚の前で膝をつきました。
「今まで、そなたに、とてもひどいことをしてしまった」
王様は深くうなだれ、砂に手をつきました。その目にとても深い悲しみの色を見た人魚は、王様の手を取って言いました。
「王様、顔を上げてください。王様は王子様のことを愛していて、私も王子様のことを愛している。それが少しうまくいかなかっただけのことです」
王様はその言葉を聞いて、人魚のやさしい心に気づきました。王様は人魚の手を強くにぎって、ありがとうとつぶやきました。人魚は、自分の心に刺さった棘が落ちていくのがわかりました。
「あ」
いきなり王子様が、驚いた声を漏らしました。人魚と王様の間の砂浜を見ています。人魚と王様も視線を落としました。そこには、砂浜には絶対咲かないような、瑞々しい白い花が咲いていました。三人が首をかしげると、その花のとなりにもう一輪、白い花が咲きました。人魚と王子様と王様は目を丸くしました。そしてまた一輪、また一輪と、ものすごい速さで花が咲いていきます。人魚がはっとして、魔女を見上げました。魔女はとても楽しそうに笑っていました。
花は人魚たちのいるところから、どんどん広がっていきました。乾いた砂や貝殻の上、街の石畳からも咲き乱れ、あっという間に砂浜と街が、白い花で埋めつくされました。

そこにいたすべての人が驚いて動けないでいると、次の瞬間、まるで突風でも吹いたかのように、すべての白い花がザッと音を立てて舞い上がりました。

「うわ……」

感嘆の声があちこちであがります。

花びらは上へ上へと舞っていき、きらきらと光って消えていきました。

見たこともない、美しい光景に、人々はため息をつきました。人魚も王子様も王様も、ぼうっと空を見つめていました。

そんな三人の姿を見て、魔女がにやりと笑いました。それは本当に楽しそうな笑顔でした。

魔女はわざとらしく自分の服をひるがえして、王様の前に立ちました。

「婚儀の時には、もっと色とりどりの花を咲かせてやろう」

結婚式の準備

王様と王子様は大急ぎで、結婚式の準備を始めました。もちろん大臣も兵士も街の人も、みんな大あわてでした。王家の結婚式のときは、国中がお祭りさわぎになるのです。なかでも城にいちばん近い城下町は、たいへんなさわぎになります。

お金のある娘は、流行りの服を新しく買い、靴も髪飾りも新調しました。お金のない娘は、自分が持っている、いちばんきれいな服や、自分の母親のお下がりを手直ししました。国中の娘たちが自分の衣裳を、結婚式の日のぎりぎりまで、手を加えていました。

子どもたちは城に続く通りの石畳を、ひとつひとつ丁寧に拭いてまわり、大

人たちは自分の家の壁を、水で洗い流しました。
呪い師のおばあさんは、素晴らしい日に雨が降ってはいけないと、喉が枯れるまで、雲よけのまじないを唱え続けました。
お城の中は、もっとてんてこまいになっていました。
久しぶりの結婚式なので、大臣たちはすっかり結婚式の手順を忘れてしまっていたのです。書庫を探しまわって、やっとの思いで、今の王様が結婚式を挙げたのときの書物を見つけたときには、すでに二日が経っていました。でもとても優秀な大臣たちだったので、なんと次の日の夕方にはすべての準備を終えていました。
召使いたちは、広すぎる城をいつも以上にすみずみまで掃除をし、広すぎる庭園にある木をすべてを刈り込み、いくつもの花壇に、赤や橙や桃や黄の小さい花をたくさん植えました。毎日毎日ほこりまみれ、土まみれになってやった

おかげで、数日後にはすべての床が鏡のように光り、庭園の木はきれいに丸く刈られ、花壇の花も瑞々しく咲きほこっていました。
兵士たちは魔女に手助けをしてもらいながら、大砲で花火を上げる計画をたてました。不慣れながらもきちんと計算して花火の玉を作り、城にある大砲全部につめました。そして汚れた自分の鎧をピカピカに磨きました。
王様は結婚の儀式に必要な、特別な剣を用意するよう、とても腕のいい鍛冶屋に命じました。大役を賜った鍛冶屋は大喜びして、その日から夢中になって作業をしました。そして、たった三日でその剣を作り上げてしまいました。
真っ白に輝く刀身に、磨き上げられた金の柄。宝石は一つも使っていませんでしたが、とても見事な模様が柄に彫られていました。
魔女は呪文を用意しました。しあわせになれるようにという、願いをこめたおまじないのようなものです。家中の本をひっくり返して、きれいな音と言葉

を入念に組み立てていきました。家中のほとんどの本が床に散らばり、足の踏み場がなくなったころ、魔女は人生でいちばんきれいな呪文を完成させました。

そして王子様は、街でいちばんの針子に、人魚にぴったりの真っ白な服を作るよう頼みました。でも針子に人魚の服など縫ったことありません。

王子様と針子は、人魚の体をすみずみまで採寸し、何度も何度も話し合いました。そしてやっとのことでできあがった絵をもとに型紙をおこし、夜も寝ずに針子は服を縫いました。そうして、真っ白な絹をたっぷりと使った、それはそれは、豪奢な服が仕上がりました。

結婚式の日

すべての準備が終わった次の日、もちろん雲一つないよく晴れた日に、ついに王子様と人魚の結婚式が執り行われました。

人魚は自分ぴったりに仕上がった真っ白な服に身を包み、馬車に乗りました。人魚は歩けないので、砂浜から大きな輿のついた馬車に乗って、お城まで行きます。馬車は白馬の二頭立てで、そのまわりにはピカピカに輝く鎧を着た兵士たちが、誇らしそうに胸を張っていました。

通りにはたくさんの人々が待ちきれない思いで、そわそわしながら、海の方をのぞいていました。

そして遠くから晴れやかな音楽が聞こえてくると、楽団、兵士、そして馬車

の頭が見えてきました。まだ人魚の姿は見えていないのに、わっと歓声があがりました。ゆっくり行進が進んでいき、やっと輿に乗った人魚の姿が見えると、なぜか歓声が途絶えました。その代わりに聞こえてくるのは温かいため息でした。それほどに人魚は美しかったのです。

王子様と針子が用意した服は、人魚のきれいな足が見えるように、前の方の裾がうんと短くなっていて、袖は長く、袂が広がっていました。それは薄く透ける人魚のひれにとても合っていました。

そして身ごろには花模様の刺繍がびっしりとほどこされていました。大きい真珠のまわりを、ぐるりと小さい真珠で囲って、そこから幾重もの花びらの模様が金糸と銀糸で縫われています。

街の人の視線を感じて、人魚の頬が赤くなりました。そして恥ずかしそうにはにかんだ笑顔を、沿道の人々に向けました。

笑顔を向けられた人々は、思い出したように、また歓声をあげて、花を投げました。街の人のほとんどが、花の入ったかごを持っているので、通りの右からも左からも、たくさんの花が湧いていました。通りだけではなく、家の二階から投げている人もいたので、まるで花の雨が降っているようでした。花は赤、橙、桃、黄、紫、青、白と、この世にある色全てが詰まっていました。しかもかごには魔女の魔法がかけられているので、どんなに花の雨を降らせても、減ることはありませんでした。

大きく手を振る街の人を見て、人魚は胸がいっぱいになりました。人魚が手を振り返すと、歓声はさらに大きくなり、そして街の人の笑顔もより明るくなります。人魚は嬉しくなって、ずっと手を振り続けました。

馬車はゆっくりゆっくり、楽団と兵士の行進に合わせて進んでいきます。街中の人たちに見てもらえるよう、とても遠回りをしながら。

とても長い時間をかかけて、街中の道のほとんどを通り、やっとお城の門が見えてきました。

人魚はその奥にあるお城を見上げました。石造りの白いきれいなお城です。人魚は少しどきどきしました。お城の中に入るのは初めてだからです。

門の前には王子様が待っていました。王子様も黒と青の絹に、銀の細かい刺繍をほどこした最上級の礼服を着ていました。馬車の奥にいる人魚の姿を見つけると、王子様は笑みをこぼしました。もう何度も見ている笑顔なのに、人魚の頬が赤くなりました。なんだか恥ずかしくて、さっきお城をみたときよりもっとどきどきしました。

門の前に馬車が到着すると、馬と輿が離されました。その変わりに四人の兵士が、輿の台座を肩にかついで、儀礼堂（ぎれいどう）まで連れて行ってくれます。

近くまで来た人魚を見て王子様は困ったように笑いました。人魚は一瞬、なにかしてしまったのかと不安になりましたが、王子様が人魚の頭と足元の台座を見たので、人魚も眉を下げて笑いました。

人魚は金と銀と真珠でできた蝶々の髪飾りを付けていましたが、その上からさらに、白い花で編まれた冠を載せていました。街の子どもたちが、自分で摘んできた花を、一生懸命に編んだものです。魔女の魔法がかかっていないので、時間がたっても消えることはありません。そして子どもたちは摘んできた花を人魚の台座にも乗せていったので、人魚はまるで花畑の中にいるように見えました。

王子様と人魚は互いに見つめ合って、やさしく笑うと、一緒にお城の中へ入っていきました。

人魚には、すみずみまで掃除されたぴかぴかの広間も、色とりどりの花が咲きみだれる中庭も、背筋を伸ばして立っている兵士の姿も、あまりよく見えていませんでした。それくらいどきどきしていたのです。

中庭の向こうに、儀礼堂が見えました。儀礼堂は、とても高い円柱を、奥から斜めに切ったような、不思議な形をしていました。お城の豪華な造りとはちがい、とても質素で、でもそれでいてすごく荘厳な雰囲気です。儀礼堂に扉はなく、半楕円の入口が、人魚の目の前にぽっかりと空いていました。その奥に、王様の姿が小さく見えました。王様の両脇には大臣が一人ずつ立っています。

人魚のどきどきが大きくなりました。でも、誰も人魚の心臓の音に気づきません。兵士と王子様はゆっくりと歩き、ついに王子様と人魚は、そろって儀礼堂の入口をくぐりました。

儀礼堂の中に入った途端、まぶしい光が人魚の視界いっぱいに広がりました。思わずぎゅっと目をつむりました。一瞬置いたのち、ゆっくりまぶたを持ち上げながら、上を見ました。

目に飛びこんできた青色に、人魚は息を飲みました。

海の青とはちがう、はかなく淡い青色。

儀礼堂の天井にはなにもありませんでした。きらびやかな絵も、瀟洒な彫刻も、天窓すらありません。人魚は天井一面に、硝子が張ってあるのだと思いましたが、それはちがいました。本当になにもなく、石造りの壁に囲まれた丸い空間には、雲一つないまっさらな空が見えるだけでした。

空なんて何度も見ているのに、青くのっぺりとした、奇妙で異質な、空ではないなにかに見えました。動くものがなにも無いので、まるで時が止まっているような気もしました。

青い色をずっと見つめていたら、なぜか心が静かになっていました。
ふと、人魚の体が前に引っぱられるように、くんっとかたむきました。あわてて前を見ると、王子様と人魚をかついだ兵士が、儀礼堂の中心より少し手前で止まっていました。中心には王様が堂々と胸を張って立っていました。
兵士は輿を降ろすと、人魚を抱きかかえようとしました。でも、その兵士の肩を王子様がつかんで止めました。兵士が驚きと疑問の顔を王子様に向けましたが、王子様はただ首を横に振るだけでした。
王子様はわざとらしく、外套をひるがえして、人魚の前にかがみ込み両腕を差し出しました。その演技がかった動きに、人魚は小さく笑うと王子様の首に腕を回しました。儀礼堂にいた全員が、あきれ顔になりました。
王子様はそのまま人魚を横抱きにして、王様の前に置いてあった、金の背もたれのない小さな椅子に座らせました。わざわざ作らせたのでしょう。普通の

ものよりかなり高く作られていて、人魚と王子様の背丈がちょうど同じくらいになるようになっていました。
王子様と人魚は王様の方に向き直りました。
王様は儀礼堂と同じような、とても荘厳で重々しい雰囲気をまとっていました。でも人魚は少しも怖くありませんでした。その顔にはとてもやさしい笑顔がありましたから。
王様は横にいた大臣から、鍛冶屋に作らせた白い刀身の剣を受け取り、ゆっくりと自分の胸の前に、掲げました。真新しい剣の刃はとても鋭く、キラキラとしていてきれいでした。王様は一息置いたあと、儀式らしい仰々しい動きでゆっくりと王子様と人魚の間に剣を下ろしました。まるで二人の間を裂こうとしているように見えました。
「王子よ。この花嫁は嘘をつくかもしれぬ」

思いも寄らない王様の言葉でしたが、儀式の言葉だということは、すぐにわかりました。王様の言葉はさらに続きます。

「この花嫁は怠惰(たいだ)かもしれぬ。

この花嫁は黒い心をもっているかもしれぬ。

この花嫁は王子のことを愛していないかもしれぬ。

この花嫁は王子を裏切るかもしれぬ。

そうではないという証明ができるか」

儀式の言葉だとわかっていても、王様の言葉は重い衝撃となって、人魚の頭を揺らしました。

なにより「心のなかを証(あか)せ」なんて、無理です。でもちゃんとした答えを返さなければ、結婚は認められないのかもしれません。人魚は不安になってきました。儀礼堂には、風の音すらすらしないので、人魚の不安は雨雲のようにどんどん広がっていきます。

ずいぶん時間が経ってから、王子様が王様に答えました。

「王よ。私はその証を示すことはできない」

そのはっきりとした声に、人魚の心がさっと冷えました。王子様の答えは、人魚を信用していないというようにも聞こえます。でも王子様の答えはそれで終わりではありませんでした。

「心を証すことなど、到底無理な話。それでも証せと言うのなら……」

王子様は自分の胸に手を置きました。

「その剣で私の胸を裂くといい。心の臓に、流れる血潮に、私の心が見えるだろう。私の彼女への愛が、きっと見えるだろう」

そんなことをされては困ります。でも、人魚は嬉しくなりました。嬉しくて嬉しくて、涙が出ました。

王子様の声には、少しの迷いもありませんでした。そしてとても挑戦的な笑みを、王様に向けていました。王様もそれとそっくりな笑顔を、王子様に向けました。

少しの時間を空けたあと、王様は短く「わかった」とだけ言いました。そして、一度自分の胸の前で剣を掲げると、剣を大臣に戻しました。

「そなたたちの結婚を認めよう。この先、なにがあろうと、蔑(さげす)むことなく、傷つけることなく、一生お互いを思いやり、傍(かたわ)らにいつづけることを誓うなら」

「愚問」

王子様の手が人魚の手をつかみました。はっとして人魚が顔を上げると、王様に向けたのと同じ、挑戦的な笑顔で人魚を見ていました。キラキラとした目は、まるで幼い子どものようです。

「私はこの者を一生の伴侶とし、これから先同じ道を、同じ時を歩むことを誓う。一生を過ぎたそのあとも、互いを思い、支え合い、愛することを誓う。この誓いはその剣にも斬ることはできない」

人魚の手をにぎる王子様の手は、言葉を重ねるごとに、強くなっていきました。強くにぎられた手は熱くて、人魚は自分の手が溶けてしまうのではないかと思いました。

「その誓いの言葉、しかと聞いた。この国の王として、またそなたたちの父として、その誓いが破られることのないよう、私は見守り続けよう」

そう言うと、もう一人の大臣が、王子様の前に頭を下げながら、なにかを差し出しました。小さな硝子の板に、黒い石のついた首飾りが乗せられていました。

王子様はその細い鎖をやさしくつまみ上げ、人魚の首にまわしながら、説明してくれました。

「宝石ではなく、黒鉄（こくてつ）という金属なんだ。恐ろしいほど硬くて加工ができない。これは運良く見つけた、小さいかけらなんだ。王子の妻となるものに贈るしきたりなんだよ」

人魚は自分の胸元に揺れる、小さな黒いかけらをまじまじと見ました。硬い金属。それは〝二人の愛は壊れない〟という素敵な意味にも思えましたが、そのぬらりと光る黒が、王家に嫁ぐということの重大さを物語っているように見えました。

でも人魚は気にしませんでした。そんなこと……そう、本当にそんなことなのです。この、しあわせに比べれば。

王子様の指が、そっと人魚の涙のあとをぬぐいました。そうして二人は、王様と大臣があきれ顔になるほど長い時間見つめ合ったあと、この世でいちばんあたたかい口づけを交わしました。

人魚のしあわせな物語は、こうして始ったのです。